

第七講 問題の提出（一） 第一章十六節、十七節の研究（二月廿七日）

第一節―七節は自己紹介、八節―十五節は挨拶であつた、此挨拶は前講の如く頗る意味ふかきものであるが、それにしても一の挨拶として述べし語たるに過ぎな居、然るに十六、十七節に入つてパウロは重大なる語を掲出して我等を驚かすのである、多くの學者は此兩節を以て羅馬書の主題の告知であるとなして居る、洵に羅馬書の主問題が茲に提出されたのである、曰ふ「我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始めギリシア人凡て信ずる者を救はんとする神の大能たればなり、神の義は之に顯はれて信仰より信仰に至れり、録して義人は信仰によりて生くべしと有るが如し」と。

先づ注意すべきは此問題提出の仕方である、パウロは十五節に於て「此故に我れ力を盡して福音を汝等ロマにある人々にも傳へん事を願ふ」と記し、次ぎに十六節の劈頭に *γαρ*（何となれば）なる一語を挿みて、十五節の理由として十六節の第一句を述べた事を示してゐる（邦譯聖書には此接続詞を省いてあるが英譯聖書には *for* の一語がある）、即ち彼は挨拶を既に終へしが如くまた終へざるが如くにして居つとはなしに主題の提起に移り行くのである、表面に主題告知とせずして挨拶の中其外共つかぬ邊りに極めて自然に之をなしたのは洵になめらかなややかたである、之は知らず識らずのあ居だに讀者に心の準備を與ふる道であつてパウロの練達せる教育家なる事を示すものである。

尚ほ注意すべき一事がある、此書を認めし頃はパウロが信仰に入りて後既に二十餘年を経過してゐた、そして

彼は此期間の大部分を傳道に用ひた、従つて此時までに於て反對者と論争を爲せし回数は無數に達したに相違ない、執拗なる猶太人と理知に強き希臘人とに圍まれての彼の孤獨の奮闘を思ふ時、その論戰の激しさは推し測らるゝのである、彼の書翰は多く斯くの如き戰塵の濛々たる間に記されたものである、従つて自から其處に砲煙の香り、彈雨の響きを止むるのである、味方に送る書翰に於ても彼は自然と敵を前にして論陣を張るが如き赴きを示し、何時如何なる所から論敵が現はれても攻撃の隙を見出し得ないやうな論法を採ることが多い、かくの如き緊張味を以て記されし彼の書翰なれば眞理の無盡藏たるのである、其上羅馬書の如きは彼の五十歳臺の作として既に二十餘年の戰を經し後の書なれば、人生の戰を長く爲なせし勇士の筆の常として一語一句一節の中にも眞理が豊かに包藏せられてゐるのである、徒らに冗長なるは戰の經驗少き未熟者の筆である、老雄の筆は簡勁〔かんけい〕にして力と生命とに富む、この十六、十七節の如きは一章劈頭の自己紹介と共に其好標本である。

先づ十六節を原文のままに譯する時は「そは我れ福音を耻とせず、何となれば是はユダヤ人を始めギリシヤ人も、信ずる凡ての者には救拯に至るべき神の力たれば也」となる、今之を原文の順序を逐ふて記せば左の如くなる、

そは我耻とせず 福音を、何となれば 是は（此福音は）神の力たればなり 救拯に至るべき 信ずる凡ての者には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも。

羅馬書を認めた時はパウロがコリントに於て傳道して居た時であつた（使徒行傳二十章二、三節を見よ）、假にパウロが右の語をロマの信者ならでコリントの聽衆に向て發したとして見よう、必ず種々の批評が起つたことであ

らう、コリントと云へば人口七十萬を有する大都であつて實業の都であると共に哲學文藝の都であつて、富者あり貧者あり、自由民あり奴隸者あり、學者あり無學者あり、實業家あり藝術家あり、誠に各階級の人を網羅せし都であつた、さればパウロの讀者も亦多種多樣であつたに相違ない。

かゝる聽衆に向つて先づ「そは我れ福音を耻とせず」と云ふたならば各種の批評が現はれたことであらう、信者の或者は之を以てパウロに似合はぬ弱き語となして不滿に感じたであらう、「姦惡なる此世に於て我と我道を耻づる者をば人の子も亦聖き使と共に父の榮光をもて來る時これを耻づべし」とはイエスの警めであつた、福音を耻ぢざるは基督者に於て固より當然のことである、今更これを更めて宣言する必要が何處にあらうか、これ無用の言たるのみならず又實に弱々しき語である、「我は福音を譽れとす」と積極的の言ひ方をせずして「耻とせず」と消極的に言ふたのは力なき態度ではないかと、多分信者の中にも無學なる者又は淺薄なる者は右の如く評したであらう、併し多少の思慮ある者は却て此語を聽いてパウロに對する敬意を増したであらう、又不信者の中にも之を弱き語と見る者もあり、或は又謙遜なる語として却てパウロを推賞する者もあつたであらう、洵に問題となるべき語である。

次にパウロは右の理由として「何となれば是は神の力たれば也」と云ふた、聽衆中の哲學者は直ちに抗議を提出したであらう、「力」とは何事ぞ、力には善き力もあり惡しき力もある、力たる事は決して其事の眞理たるを示さない、もし基督教が大體系 (great system) である云ふならば我等はそれに特別の敬意と注意とを拂はう、併したゞ力であると云ふ事なれば其低級なる教たる事明らかであると、次に其力は「救拯に至るべき」力である

と聽いて彼等は又救拯とは無意義な事であると評するであらう、「信ずる凡ての者には」と云へば信仰なるものは迷信である場合多く到底識者の貴ぶものではないと云ふであらう、そして最後に「ユダヤ人をはじめギリシア人にも」と云はるれば、此全く異なる二人種を一括して一と見しパウロの態度に不服を唱うるであらう、斯く十六節は種々の批評を喚起し得べき語である、不信者よりは勿論信者のある者よりさへも。

然らば次ぎの十七節は如何、これ凡ての人を首肯せしむべき善き語であらうか、今之を原文のままに譯する時は「そは之に於て神の義は顯れ信仰より信仰に至ればなり、錄して義人は信仰によりて生きんとあるが如しく、となる、さらに原文の順序のままに之を譯せば左の如くである、

そは 神の義は 之に於て 顯はたればなり 信仰より信仰にまで、かく錄されしが如し「義人は信仰によりて生きん」と。

此十七節に對しても讀者は勿論種々の批評を下すことであらう、或人々に取つては第一「神の義」といふ語が甚だ喜ばしからぬ語である、神の恩恵と云ひ神の愛と云ふて初めて福音の本義を表はし得べきに、神の義と云ふは即ち神の怒神の懲罰と一致するらしき語にして最も厭はしき語であると云ふであらう、神の恩恵と愛のみを喜び其義を好まぬ者は必ず右の如く云ふに違ひない、次ぎ「顯はれたる」とは人間の努力の結果到達したのとは全く正反對であつて、上より啓示されたと云ふのである故、人類の眞理探究と云ふ貴重なる努力を無視する嫌がある（きらい）と云ふであらう、又「信仰より信仰まで」と信仰を以て終始する如き口調は最も厭はしきものであると評するであらう、そして最後に聖句を引いて自説を支持せしめしを見て、聖書の言を無批評に眞理とするは唾棄すべき旨

目的態度であると貶へんするであらう。

以上の如き反對や批評を起こし易き語をパウロが茲に羅馬書の主題として掲出するのは如何にも拙劣なる、又は意地悪き遣方やりかたであるやうに思はれる、さり乍ら不思議なるはパウロの言である、理論に於ては反對すべき幾つもの箇處を見出す人と雖も、どこか其處に或貴きものが在る如く感ぜられて我にもあらで彼の言に牽き着けられるのである、多分コリントの多くの聴者は斯くの如き心理状態に於て彼を離れ得なかつたのであらう、此十六、十七節の如きは慥かに此パウロ的特徴の色濃きものである。

「我は福音を耻とせず」の一語を以て弱しとなすは淺き見方である、之をパウロの學識と經驗と愼慮との背景に於て眺めて其強烈なる語たることが解る、彼は世界を知らずして獨り己を高しとするユダヤ人ではなかつた、彼は時代の文化の偉大を知らずして我信ずる教の偉大をのみ知る無學漢ではなかつた、彼は世界を知つて居た、彼は希臘の文化と羅馬の政制の優秀なるを知つて居た、其哲學と科學と藝術との偉大を知つて居た、其内に潜む思想に於て、その外に現はるゝ事業に於て當時の文化は燦として日月と其光輝を爭はんとする概があつた、盲者めくら蛇に怖おそわずと云ふ、盲者ならぬ彼は蛇に對する警戒をせねばならぬ、勿論彼の信ずる福音は默示に基づくものであつて人間探究の成果ではない、此點に於て人間の努力の總積に名を與へたる文化てふ者とは全然性質を異にせるものなることは彼に於て極て明白であつた、しかし乍ら當時の文化の偉大を知り且或意味に於て之に敬意を抱ける彼は、福音を携へて此文化の中心に投ぜんとして如何に精到なる考慮と準備とを要したことであらう、凡ての哲學思想に訴へても福音的宇宙觀の優逸なるを證し、有ゆる科學的探究に比しても福音的眞理の確實なるを示

し、此世の有りと有ゆる力に較べても福音の力の絶倫なるを唱へんが爲には、勿論それ相當の準備なきを得ないのである、ロマ府を志せし彼は遙かに此知識と能力ちからの中心地を望み見て自己の小なるを痛感し、或時は恰も一個の爆弾を携へて百萬の敵軍に突入するが如き戦慄を感じたことであらう、未だ福音がユダヤの一地方教と看做され居たる時に於て羅馬大帝國の凡ての文化と權力とを敵として、それ等を排逐して代るべき人生の原理として福音を提示せんとす、人の眼より見て如何に無謀の極であつたであらう、されば流石の彼も幾度か怖れ、踏たふひ、苦み、悩んだことであらう、しかも斯くの如き心の経過を味ひて後遂に準備悉く整ひ確信全く成りて「我は福音を耻とせず」の一句を發す、げに壯烈高貴の語と云ふべきである。

此世の知識に富み人生の經驗に豊かなりし彼パウロが、其抱ける凡ゆる知識と經驗とに訴へて福音の確實性を了知し、此世の力と云ふ力を悉く集めたるらしき^{（はうぜん）}彪然たる大帝國を前にして、身は一己卑賤なる天幕工を以てして「我は福音を耻とせず」の一語を發す、これを今日に於て聞く我等は此語の貴さを知ると共に、此語を發したる彼に百萬の援兵を見出したるが如き感なきを得ない。

然らば福音を耻とせざる理由如何、「何となれば是は神の力たればなり」と先づ云ふ、福音は「力」である、そして人の力ではない、「神の」力である、此世の哲學と比せよ、「力」と云ふが既に特異なるに更に「神の」と附加して二重に特異となるのである、「それ十字架の教は亡ぶる者には愚なるもの、我等救はるゝ者には神の力たるなり」（コリント前書一の十八）とパウロは曾て云ふた、福音は哲學に勝る大宇宙觀である、しかし福音は哲學の如き單なる思想の體系システムではない、福音は實に神の力である、茲に福音の特色が在る、パウロは思想家であつた、

しかし思想家たる以上に實驗家であつた、故に思想の完全とか徹底とか云ふ事よりも先づ求むる所は人生に於ての力の有無如何に存した、「ギリシヤ人には愚なるもの」と見ゆるも、それは福音の力たるを知らぬ人の淺き見方である、故に一度これが人を救ふ力たる事を知りし上は、之は「ギリシヤ人にも……神の力また神の智慧」たるのである。

福音は力である、神の力である、「力である、それは福音は或事を爲し得るからである、神の力である、それはその凡ての約束を果し得るからである」(ホフマン)、「神の力と云ふ、大にして榮あるものである」(ベンゲル)、悔改、信仰、慰藉、愛、平安、歡喜、勇氣、希望——此世の哲學倫理の供し得ざるもの——之を與ふる力が福音に在る、福音に此力があると云ふが其神の眞理たる一證である、世の哲學者は福音を愚なるものと見る、しかし基督信徒の有する熱心に對しては推賞を惜まぬ者がある、恐くは當時の哲學者、思想家等もパウロに對して其所説を嘲りつゝも其熱心と勇氣に驚愕の眼を張つたことであらう、實に彼の生涯其者が福音の有する力を實證するものであつた、彼は此力を深く自己に於て味ひたるが故に、文明と權力の都 로마を前にして「我は福音を耻とせず」と云ひ得たのである。

「力」の原語は *dynamis* (ドゥナミス) である、英語 *dynamics* (力學) *dynamo* (發電機) 等は此語より出たものであり、又かの *dynanite* (爆裂彈) もさうである、ダイナマイトは元來罪惡遂行の器として發明せられたものではない、文明の開發を目的として發明せられしものである、近代の文明が如何に鐵道に負ふ所多きかを考ふる時は鐵路を通ずべく巖石を碎くダイナマイトの偉功を稱へざるを得ない、一小片を以て巨大なる岩石を

微塵に碎き得るは之れである、故にダイナマイトは力の絶好なる代表者である、福音は實にダイナマイトの如き力あるものである、之に比しては倫理道德は鶴嘴を以て堅岩を碎かんとするが如き迂遠なる道である、福音のダイナマイト一度我を打つや倫理道德を以ては到底除き得ざりし執拗なる我執の巖も飛散し去るのである。

福音は神の力である、故にパウロは福音を耻としないのである、然り寔に福音は神の力である、併し其の神の力なる事は其力に觸れてみて初めて解ることである、そして或人は之に觸れ或人は之に觸れない、從つて福音は在人に取つては力であり或人にとつては力でない、然らばそれは如何なる人々に取て力であるか、パウロは云ふ「信ずる凡ての者には」其人の救を生むべき神の力であると、*πᾶσι τοῖς πιστεύουσιν* (to every one that believeth) である、信ずる者は一人残らず——其一人一人に取て——福音は救に至らす力である、信仰——之が救済に與るに要する唯一の條件（もし條件と稱し得べくば）である、他に條件は一つもない、たゞ信ずると云ふだけの條件である、そして其信仰は必しも強きを要しないのである、勿論強きを貴ぶけれども弱き信仰とても苟も虚偽の信仰たらぬ限りは其の持ち主をして救ひに至らしめ得るのである、ただの信仰、神とキリストとに對する信仰、神を父としキリストを主として仰ぎ瞻る事、それだけで救ひに入るのである。

實に簡單である、長き努力に依て悟道の妙境に到達して救はれるのではない、一生涯の努力を以て善行を山と積んで救はれるのではない、たゞの信仰、信賴、それに依て救はれるのである、「信ずる凡ての者」である、信ずる者は誰でもである、その遺傳の如何は勿論問題とならぬ、其知識、人格、德行等も勿論問題とならぬ、如何なる惡しき祖先や父母を有する者にも、不幸にして其脈管の中に汚濁の血を湛うる者にてても、ただ信仰によつて救

はれる、其人格に於て低き者と雖も唯の信仰に由て救はれる、信仰に入りし後に於て其人格の向上を生むべきも、それは又別箇の問題である、同時に人格に於て高等なる者と雖も信仰なくば救はれない、人格の高下と云ふ事は救ひといふ事を離れて他の標準に於て眺むる時は充分に問題となることである、たゞ救ひの事に於ては之は問題とならぬのである、其他知識、徳行、技能等いづれも皆問題とはならぬのである。

「信ずる凡ての者」の一句を更に次ぎの十七節と合せ見て、羅馬書の主題の性質が信仰中心なることは察せられる、この兩節は本館の入口に掲げられある大標語であるが、之を読みし者は未だ本館に入らずして本館の中心が信仰にあることを窺知するのである。

信ずる凡ての者が救はると云ふ、寔に福音の福音たる所以が茲に存する、この事の容易に受け納れ難き理由は、それが餘りに有り難きことなる故である、多くの人は何か自己に於て資格を作りて後救ひの門戸に受け入れられようと計る、従つて自己の無資格を痛歎^{つたあはれ}哀哭するうちに幾年かの貴き歳月を空しく流れさするのである、又先天的缺陷を有する者は此缺陷の蔽ひ難きを感じて救ひに關しては全き絶望に陥るに至る、併し共に是れ誤れるの甚しきものである、遺傳による惡事、先天的の病患、後天的の諸惡知識と徳行と品性との不足、自己の上に積み重なりし罪惡の深重——いづれも是れ我救の妨げとなるものではない、たゞの信仰によりて救はる、その信仰の弱きさへも救に至るに於ては——其信仰が持續さへすれば——妨げとならぬのである。

かく福音は信ずる者には救拯に至るべき力である、此事が本館の戸口に大書せられあるを見て、我等は先づ少からぬ歡喜と平安との豫感を味ひ、本館内部の性質をも察し得るが如く思はれて、かくの如き福音なれば我の如

き罪人をも救ひ得との希望を茲に抱くのである。

第一節から第七節は自己紹介、第八節から第十五節は挨拶である。この挨拶は、前の講義でも触れたように非常に意味深いものだが、それも一つの挨拶として述べられた言葉にすぎない。しかし、第十六節、第十七節に入ると、パウロは極めて重大な言葉を掲げ、私たちを驚かせるのである。多くの学者はこの二つの節をローマ書の主題の告知であるとしている。まさしくローマ書の主要な問題がここに提出されたのだ。パウロは「私は福音を恥としない。この福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人、すべて信じる者を救うための、神の大きな力だからである。神の義はこれに現れ、信仰から信仰へと至る。聖書に『義人は信仰によつて生きる』と記されているとおりである」と述べている。

とを示している。

さらにもう一つ、注意すべきことがある。この書簡を書き記した頃、パウロが信仰に入ってから既に二十数年が経過していた。そして、彼はこの期間の大部分を伝道に費やした。したがって、この時までには反対者と論争をした回数は数えきれないほどに達したに違いない。しつこいユダヤ人と、理知に強いギリシア人に囲まれての彼の孤独な奮闘を思う時、その論戦の激しさは推し量ることができる。彼の書簡は多く、このような戦いの火花が飛び交う中で記されたものであり、それゆえ自然と砲弾の香り、弾雨の響きを留めている。味方に送る書簡においても、彼は自然と敵を前にして論陣を張るかのような雰囲気を示し、いついかなる所から論敵が現れても攻撃の隙を見出し得ないような論法を採ることが多い。このような緊張感をもって記された彼の書簡は、真理の尽きない宝庫である。その上、ローマ書のように彼が五十歳代で書いたもので、既に二十数年の戦いを経た後の書簡であるから、人生の戦いを長く続けてきた勇士の筆の常として、一語一句、一節の中にも真理が豊かに包み隠されている。いたずらに冗長な文章は、戦いの経験の少ない未熟者の筆である。老練な勇士の筆は簡潔で力強く、生命力に富んでいる。この第十六節、第十七節のような文章は、第一章冒頭の自己紹介と共に、その良い手本である。

まず第十六節を原文のままに訳すならば、「そは我れ福音を恥とせず、何となれば是はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、信ずる凡ての者には救拯に至るべき神の力たれば也」となる。今これを原文の語順を追って記すならば、次のようになる。

そは我れ恥とせず 福音を、何となれば 是は（この福音は）神の力たればなり 救いに至るべき 信ずる
すべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも。

ローマ書を書き記した時、パウロはコリントにおいて伝道していた時であった（使徒行伝二十章二、三節を参照）。
仮にパウロが上記の言葉をローマの信者ではなくコリントの聴衆に向けて発したとしてみよう。必ず様々な批判
が起こったことであろう。コリントといえば、人口七十万を有する大都市であり、実業の都であると共に哲学や
文芸の都でもあった。富者もいれば貧者もあり、自由民もいれば奴隷もあり、学者もいれば無学者もあり、実業
家もいれば芸術家もあり、実に各階級の人々を網羅した都市であった。それゆえ、パウロの読者もまた多種多様
であったに違いない。

このような聴衆に向かって、まず「そは我れ福音を恥とせず」と言ったならば、各種の批判が現れたであろう。
信者のある者は、これをパウロに似合わない弱々しい言葉として不満に感じたであろう。「だけでも、このような
姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いた
ちとともに来るとき、その人を恥じます」（マルコの福音書八章三十八節）とはイエスの戒めであった。福音を
恥じないのは、キリスト者にとって当然のことである。今更改めてこれを宣言する必要がどこにあるうか。これ
は無用の言葉であるだけでなく、実に弱々しい言葉である。「私は福音を誇りとする」と積極的な言い方をせず、
「恥とせず」と消極的に言つたのは、力のない態度ではないかと、おそらく信者の中でも無学な者または浅薄な
者は上記のように評したのであろう。しかし、多少の思慮ある者は、かえつてこの言葉を聞いてパウロに対する敬

意を増したであろう。また不信者の中にも、これを弱々しい言葉と見る者もいれば、あるいはまた謙遜な言葉として、かえってパウロを評価する者もいたであろう。実に問題となるべき言葉である。

次にパウロは、上記の理由として「何となれば是は神の力たれば也」と言った。聴衆の中の哲学者は直ちに抗議を提出したであろう。「力」とは何事か。力には良い力もあり、悪い力もある。力であることは、決してその事が真理であることを示さない。もしキリスト教が大体系 (great system) であるというならば、私たちはそれに特別な敬意と注意を払おう。しかし、単に力であるというならば、その教えの低級さは明らかである、と。次に、その力は「救いに至るべき」力であると聞いて、彼らはまた救いとは無意味な事であると評するであろう。「信ずるすべての者には」と言えば、信仰なるものは迷信である場合が多く、とうてい識者の尊ぶものではないと言うであろう。そして最後に、「ユダヤ人をはじめギリシア人にも」と言われると、この全く異なる二つの人種を一括して一つと見なしたパウロの態度に不満を唱えるであろう。このように第十六節は、不信者からはもちろん、信者のある者からさえも、様々な批判を呼び起こし得る言葉なのである。

それでは次の第十七節はどうか。これはすべての人を納得させるべき良い言葉であろうか。今これを原文のままに訳すならば、「そは之に於て神の義は願れ信仰より信仰に至ればなり、録して義人は信仰によりて生きんとあるが如し」となる。さらに原文の順序のままにこれを訳せば、次のようになる。

そは 神の義は これにおいて 現れたればなり 信仰から信仰にまで、かく記されしが如し 「義人は信仰によつて生きる」と。

この第十七節に対しても、読者はもちろん様々な批判を下すであろう。ある人々にとっては、まず「神の義」という言葉が甚だ喜ばしからぬ言葉である。「神の恵み」と言い「神の愛」と言って初めて福音の本来の意味を表し得るのに、「神の義」と言うのは、すなわち神の怒り、神の懲罰と一致するらしい言葉で、最も嫌わしい言葉であると言うであろう。神の恵みと愛のみを喜び、その義を好まぬ者は必ず上記のように言うに違いない。次に「現れたり」とは、人間の努力の結果到達したのとは全く正反対であって、上から啓示されたと言うのであるから、人類の真理探究という貴重な努力を無視する嫌いがあると言うであろう。

また「信仰より信仰まで」と、信仰をもって終始するような言い方は最も嫌わしいものであると評するであろう。そして最後に、聖句を引いて自説を支持させたのを見て、聖書の言葉を無批判に真理とするのは唾棄すべき盲目的態度であると非難するであろう。

以上のような反対や批判を起こしやすい言葉をパウロがここにローマ書の主題として掲出するのは、いかにも拙劣な、あるいは意地悪なやり方であるように思われる。しかしながら、不思議なのはパウロの言葉である。理論においては反対すべき幾つもの箇所を見出す人であっても、どこかそこに尊いものがあるように感じられ、われにもあらず彼の言葉に引きつけられるのである。おそらくコリントの多くの聴者は、このような心理状態において彼を離れ得なかったのであろう。この第十六節、第十七節のような言葉は、確かにこのパウロ的な特徴の濃いものである。

「我は福音を恥とせず」という一語をもって弱々しいとするのは、浅はかな見方である。これをパウロの学識

と経験と慎重さの背景において眺めてこそ、その強烈な言葉であることが理解できる。彼は世界を知らずして一人己を尊いとするユダヤ人ではなかった。彼は時代の文化の偉大を知らずして、自分が信じる教えの偉大さのみを知る無学な者ではなかった。彼は世界を知っていた。彼はギリシアの文化とローマの政体の優秀さを知っていた。その哲学、科学、芸術の偉大さを知っていた。その内に潜む思想において、その外に現れる事業において、当時の文化は太陽や月とその光を競う勢いがあった。「盲者は蛇を恐れない」と言うが、盲者ではない彼は、蛇に対する警戒をしなければならない。もちろん、彼の信じる福音は黙示に基づくものであって、人間探究の成果ではない。この点において、人間の努力の総和に名を付けた文化というものは、全く性質を異にするということ、は、彼にとって極めて明白であった。しかしながら、当時の文化の偉大さを知り、かつある意味においてこれに敬意を抱いていた彼は、福音を携えてこの文化の中心に飛び込むうとして、いかに精緻な考慮と準備とを要したことであろうか。すべての哲学思想に訴えても福音的な宇宙観の優越性を証明し、あらゆる科学的探究に比べても福音的な真理の確実性を示し、この世のありとあらゆる力に比べても福音の力の並外れた素晴らしさを唱えるためには、もちろんそれ相応の準備なしにはいられないのである。ローマの都を目指した彼は、遙かにこの知識と力の中心地を望み見て、自己の小ささを痛感し、ある時はまるで一個の爆弾を携えて百万の敵軍に突入するかのような戦慄を感じたことであろう。まだ福音をユダヤの一地方の教えと見なされていた時に、ローマ大帝国のすべての文化と権力を敵として、それらを排除して代わるべき人生の原理として福音を提示しようとする。人の目から見ていかに無謀の極みであったであろうか。それゆえ、さすがの彼も何度か恐れ、ためらい、苦しみ、悩

んだことであろう。しかも、このような心の経過を味わい、ついに準備がすべて整い、確信が完全に固まって、「我は福音を恥とせず」という一句を発する。まことに壮烈で高貴な言葉と言うべきである。

この世の知識に富み、人生の経験に豊かであった彼パウロが、その抱えるあらゆる知識と経験に訴えて福音の確実性を理解し、この世の力という力をすべて集めたいという巨大な大帝を前にして、自らは一介の卑しい天幕職人でありながら「我は福音を恥とせず」という一語を発する。これを今日において聞く私たちは、この言葉の尊さを知ると共に、この言葉を発した彼に百万の援軍を見出したかのような感動を覚えずにはいられない。

それでは福音を恥としない理由は何か。まず「何となれば是は神の力たればなり」と言う。福音は「力」である。そして人の力ではない、「神の」力である。この世の哲学と比べてみよ。「力」と言うだけでも既に特異なのに、さらに「神の」と付け加えることで二重に特異となるのである。「十字架のことばは、滅びる者にとっては愚かであっても、救われる私たちには神の力です」（コリント人の手紙第一章十八節）と、パウロはかつて言っている。福音は哲学に勝る大いなる宇宙観である。しかし、福音は哲学のような単なる思想の体系（システム）ではない。福音は実に神の力である。ここに福音の特色がある。パウロは思想家であった。しかし、思想家である以上に実験家であった。ゆえに、思想の完全さや徹底ということよりも、まず求める所は人生における力の有無にかかっていた。「ギリシア人には愚かなもの」と見えるのも、それは福音の力であることを知らない人の浅い見方である。ゆえに、一度これが人を救う力であることを知った上は、これは「ギリシア人にも……神の力また神の知恵」となるのである。

福音は力である、神の力である。「力である。それは福音がある事を為し得るからである。神の力である。それはそのすべての約束を果たし得るからである」(ホフマン)、「神の力という、大いにして栄光あるものである」(ベッセル)。悔い改め、信仰、慰め、愛、平安、喜び、勇気、希望——この世の哲学や倫理が提供し得ないもの——これを与える力が福音にある。福音にこの力があるということが、その神の真理であることの一つの証拠である。世の哲学者は福音を愚かなものと見る。しかし、キリスト信徒の有する熱心に対しては賞賛を惜まない者がいる。おそらく当時の哲学者、思想家等もパウロに対してその主張を嘲りながらも、その熱心さと勇気に驚きの眼を見張ったことであろう。実に彼の生涯そのものが、福音の有する力を実証するものであった。彼はこの力を深く自己において味わったがゆえに、文明と権力の都ローマを前にして「我は福音を恥とせず」と言い得たのである。

「力」の原語は *dynamis* (ドゥナミス) である。英語の *dynamics* (力学)、*dynamo* (発電機) などはこの語から出たものであり、またあの *dynamic* (爆裂弾) もそうである。ダイナマイトは元来罪惡遂行の道具として発明されたものではない。文明の開拓を目的として発明されたものである。近代の文明がいかに鉄道に負う所多きかを考える時、鉄路を通すべく岩石を砕くダイナマイトの偉大な功績を讀えずにはいられない。一片の小さなかけらをもって巨大な岩石を粉々に砕くことができるのはこれである。ゆえにダイナマイトは力の絶好の代表者である。福音は実にダイナマイトのような力あるものである。これに比べては、倫理道德はつるはしをもって堅い岩を砕こうとするような遠回りの道である。福音というダイナマイトが一度私たちを打つや、倫理道德をも

ってしてはどうてい取り除くことができなかった、しつこい我執という岩も飛び散って消え去るのである。

福音は神の力である。ゆえにパウロは福音を恥としないのである。然り、まことに福音は神の力である。しかし、その神の力であることは、その力に触れてみて初めて解ることである。そしてある人はこれに触れ、ある人はこれに触れない。したがって、福音はある人にとっては力であり、ある人にとっては力でない。それでは、それはどのような人々にとって力であるのか。パウロは「信ずるすべての者には」その人の救いを産むべき神の力であると言う。原文では *καὶ τὸ πᾶσι τοῖς πιστεύουσιν* (to every one that believeth) である。信ずる者は一人残らず——その一人一人にとって——福音は救いに至らせる力である。

信仰——これが救いにあずかるために必要な唯一の条件（もし条件と呼び得るならば）である。他に条件は一つもない。ただ信じるというだけの条件である。そして、その信仰は必ずしも強いことを要しないのである。もちろん強い信仰は尊ばれるが、弱い信仰とても、偽りの信仰でない限りは、その持ち主を救いに至らせることができるのである。ただの信仰、神とキリストに対する信仰、神を父としキリストを主として仰ぎ見ること、それだけで救いに入るのである。

実に簡単である。長い努力によって悟りの妙境に到達して救われるのではない。一生涯の努力をもって善行を山と積んで救われるのではない。ただの信仰、信頼、それによって救われるのである。「信ずるすべての者」である。信ずる者は誰でもである。その遺伝のいかんはもちろん問題とならない。その知識、人格、徳行などももちろん問題とならない。いかなる悪い祖先や父母を有する者にも、不幸にしてその血管の中に汚れた血を湛えてい

る者であっても、ただ信仰によって救われる。その人格において低い者であっても、ただの信仰によって救われる。信仰に入った後において、その人格の向上を生むべきだが、それはまた別個の問題である。同時に、人格において高等な者であっても、信仰なくば救われない。人格の高低ということは、救いということから離れて他の標準において眺める時は、十分に問題となることである。ただ救いのことにおいては、これは問題とならないのである。その他、知識、徳行、技能など、いずれも皆問題とはならないのである。

「信ずるすべての者」の一句を、さらに次の第十七節と合わせ見て、ローマ書の主題の性質が信仰中心であることは察知される。この二つの節は本館の入口に掲げられている大きな標語であるが、これを読んだ者はまだ本館に入らずして、本館の中心が信仰にあることを窺い知るのである。

信ずるすべての者が救われると言う。まことに福音の福音たるゆえんがここに存在する。この事が容易に受け入れ難い理由は、それがあまりにも有り難いことであるからである。多くの人は、何か自己において資格を作った後、救いの門戸に受け入れられようと計る。したがって、自己の無資格を嘆き悲しむうちに、幾年かの貴い歲月を空しく流してしまうのである。また先天的な欠陥を有する者は、この欠陥の覆い難いことを感じて、救いに関しては完全な絶望に陥るに至る。しかし、共にこれは誤りが甚だしいものである。遺伝による悪事、先天的な病患、後天的な諸々の悪、知識と徳行と品性の不足、自己の上に積み重なりし罪惡の深重——いずれもこれは私たちの救いの妨げとなるものではない。ただの信仰によって救われる。その信仰の弱ささえも、救いに至るにあたっては——その信仰が持続さえすれば——妨げとはならないのである。

このように福音は、信する者には救いに至るべき力である。この事が本館の戸口に大きく書かれているのを見て、私たちはまず少なからぬ喜びと平安との予感を味わい、本館内部の性質をも察し得るかのように思われて、このような福音ならば私たちのような罪人をも救い得るとの希望をここに抱くのである。